

国語における一人読みの力を付ける授業改善

～5年生「大造じいさんとガン」を通して～

池田小学校 石田 利永子

1 授業改善の視点

- ・ 児童の立場に立った一人読みの仕方の指導

2 具体的な実践

(1) 一人読みの仕方

多くの児童は、一人読みをどうやったらよいか戸惑う。

高学年「C読むこと」領域における文学的な文章の解釈の指導内容は、以下のように書かれている。

中学年(1)ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと



高学年(1)エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること

このことから、高学年では、自分の考えを構造的にまとめる力を身に付けることが大切だと考えた。

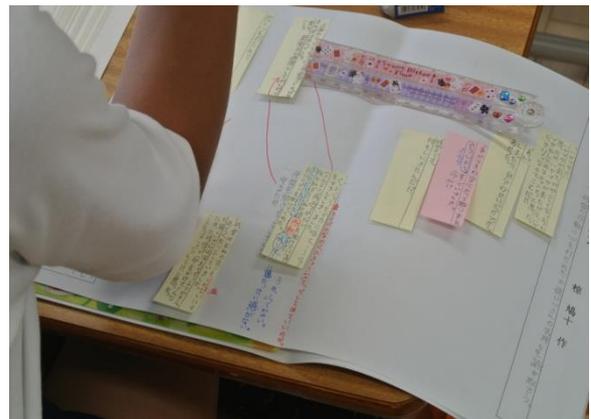
そこで、「大造じいさんとガン」では、一人読みの視点を、大造じいさんと情景の2点に絞って読み取るよう指導した。



[一人読みをする児童の様子]

また、自分が読み取った登場人物の心情の変化をワークシートに分かりやすく構成することができるよう、貼る位置を何度も修正できる付箋(大造じいさんを黄色、情景を赤色)を活用して行った。

特に「大造じいさんとガン」という教材は、大造じいさんの一喜一憂する様子や情景描写までもが心情をリアルに表現していることから、心情曲線を意識したワークシート作りの勉強に適した教材である。そこで、誰が見ても大造じいさんの心情の変化が一目で分かるようなワークシート作りを自分の力でできるようにすることを目指した。



[心情曲線を意識し、矢印を使って言葉と言葉を関連づけて表そうとした児童のワークシート]

しかし、5年生の児童にとってそれは、これまでに経験したことのない活動である。なぜなら、中学年まで児童は、上半分に本文・下半分に一人読みを書き込むワークシートで学習してきたからである。

そこで、板書や掲示を児童のワークシートと同じ形式にし、児童のワークシート作りの手本となるよう、前時までの板書を教室に掲示するようにした。そのために、事前に板書計画を毎

時間立て、学年会で相談し、誰もが分かりやすい板書を心掛けた。



[2場面の板書]



[前時までの板書の掲示]



[机間指導の様子]

3 実践を振り返って考えられること

- (1) 指導内容の系統性を踏まえたワークシート作りが自分の力のできるよう、児童のワークシートと同じ様式の板書とし、それを児童の手本として掲示したことにより、児童のワークシートが場面の学習を重ねることによりよいものになった。
- (2) 机間指導をすることにより、自信がもてない児童が進んで挙手することができるようになり、国語に対して苦手意識をもっていた児童も、「大造じいさんとガン」の学習後のアンケートでは、国語が楽しいという回答が多くなった。

(3) 机間指導

自分の考えに自信がもてない児童を中心に机間指導し、教師が赤ペンでよい意見に○をつけたり、声をかけたりすることを続けたことで、自信をもって挙手する児童が増えてきた。

また、このとき教師は、本時の課題に迫るための読み取りができていない児童を事前に机列表や板書計画を持ってチェックしていくと、その後の話し合いを意図的に仕組むことができるので有効である。